

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 小沢 誠

論 文 題 目

新たな聴衆層の誕生
1980年代日本におけるマーラーブームの事例から

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学教授	近本 謙介
委員	名古屋大学教授	宮原 勇
委員	名古屋大学准教授	東 賢太郎
委員	名古屋大学准教授	吉田 早悠里
委員	日本福祉大学准教授	西島 千尋

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、日本のクラシック音楽愛好家の間でそれまでさほど注目を集めていなかったグスタフ・マーラーとその楽曲が、1970年代以降に演奏回数が急激に増加し、1980年代以降にブームを迎えた事実注目し、このブームの背景を従来のクラシック音楽愛好家とは異なる「新たな聴衆」の出現という観点から読み解こうとしたものである。本論文は、全体で6つの章からなっている。

序章では、マーラーおよびそのブームを論じた先行研究の批判的検討と、本論文における理論的枠組みとして、とくに渡辺裕の「軽やかな聴衆」論[1990]と、ピエール・ブルデューの「界」理論[1990]が検討され、これらをふまえた問題提起がなされる。

第1章では、作曲家マーラーとその音楽が概観され、ユダヤ人のマーラーがワーグナーの大規模な音楽性、強い思想性を継承しつつも、聴き手と作曲家が対話するような親しみやすさ、自由さを併せもった楽曲を生み出し、これらの音楽の性格と特徴は、当時から聴き手と聴き方に多様性を容認するものであったことが指摘される。

第2章では、明治政府による西洋音楽導入を契機に、教養主義と結びつきつつベートーヴェンを中心としたクラシック音楽の聴衆層が形成されたこと、第二次世界大戦後は労音活動、鑑賞教育などによりクラシック音楽がより広い階層に普及する一方、1970年代以降はその聴き方に変化がみられたこと、複製音楽再生のインフラと技術が整備されたことなどを中心に、音楽をとりまく社会環境の変遷が詳述される。

第3章では、1950年代から1980年代にかけて、大衆化の進行とともに戦前からの伝統であった教養主義が衰退し、社会不安の増大を背景に古典音楽とは異なるマーラーの音楽が注目され始めたこと、この時期にはポピュラー音楽も含め、集団的聴取を特徴とする従来の音楽の聴き方から各自が個室で聴くスタイルへと音楽の聴き方が変化したこと、これが複製音楽機器の普及と高性能化があつて初めて可能となったことが指摘される。

第4章では、マーラーの楽曲とマーラーの思想が1980年代の日本において急激に人気を集めた要因について、(1) マーラーが普及する環境条件の整備、(2) 聴衆と音楽の聴き方の変化、(3) 音楽関連メディアの活動とその役割、から考察される。そして、マーラーの音楽は作曲者と個々に直接対話するというこの時期の聴衆の欲求に応え得る楽曲と思想性を備えており、知識人とメディアによるマーラー論の隆盛、映画やCMへの起用もブームを後押ししたことが指摘される。

第5章では、これまでの議論が総括され、教養主義の衰退と社会不安の増大に加え、高品質の複製音楽機器の発達もあつて幅広い社会階層の聴衆が個別にマーラーと対話するような音楽の聴き方が可能となったことで多様な聴衆がマーラーの音楽性と思想性を身近に感じるようになり、それまでのクラシック音楽愛好家層とは異なる新たな聴衆層と「界」が登場したと結論づけられる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

グスタフ・マーラーの音楽と思想については、これまでもさまざまに論じられてきた。しかし、1980年代の日本でマーラーが急激に人気を集めるようになった要因を解明しようとした研究は、人類学、社会学、そして日本におけるクラシック音楽の普及を論じた研究分野においてもみられなかった。例外的に、音楽学者の渡辺裕によるマーラーの文化史論〔渡辺 1990〕はこの問題について鋭い洞察を示した先駆的業績といえるものの、実証的な研究とはいえず、社会的背景に対する考察も十分ではない。

本論文は、マーラーの音楽と思想がもつ特徴に留意しつつ、ブルデューの「界」概念を手がかりに社会階層の変動に注目し、1960年代から1980年代の日本における社会階層の変動と音楽を取り巻く諸環境の動向の分析からマーラーブームの要因を読み解こうとしたもので、その問題の設定のしかた、着眼点、用いた研究手法、導き出される結論のいずれにおいても、きわめて独創的な成果となっている。

本論文は、統計資料を積極的に活用し、マーラーをベートーヴェンやモーツァルト、ワーグナーなどと比較しながら、日本の交響楽団による定期演奏会の上演回数、レコードの売り上げ状況、ラジオ放送の放送回数の推移をグラフ化して示す一方、文学者や音楽評論家によるマーラー論評の動向を追うことで、マーラーブームの推移をわかりやすく可視化して提示しているが、これらは新しい貢献として高く評価できる。

次に、本論文は労音の会員数の推移、労音の会員数と大学進学率の相関関係、日本のGDP成長率の推移を図示しつつ、これらを語り資料と対照させながら、この時期に高等教育の大衆化と教養主義の衰退がクラシック音楽の聴衆層と聴き方の変化と連動していること、この時期には高度経済成長が曲がり角を迎え、社会不安が増大したことを主張するが、ここにマーラーの演奏回数の推移とFMエアチェック、システムコンポ、ドルビーシステム、LPやとくにCDの登場など、オーディオ機器の開発と複製音楽の普及の推移を関連づけて示すことでその説得性を高めようとした点は独創的である。さらに本論文は、当時のクラシック音楽の聴衆の見解を探るため、京都と東京の老舗音楽喫茶においてフィールドワークを実施し、当時を知る店員に対する聞き取り調査と雑記帳に書かれた内容の分析をおこなったが、これらによって質的資料と量的資料を巧みに併用しつつ、本論文の実証性を高めている点も評価に値する。

ただし、本論文には課題も残されている。研究対象は聴衆であるが、対面による質的な聞き取り調査を実施できた人数は多いとはいえず、聴衆の音楽経験を彼らの出自、社会階層、生活史などとの関連においてさらに精査する必要がある。「界」についても、社会階層間の権力闘争の側面についての考察にはなお深化の余地を残している。ただし、これらはいずれも本論文の価値を大きく損なうほどのものではない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。